

# 平成 19 年漁期 イカナゴ新仔（シンコ）漁況予報

平成 19 年 2 月 20 日  
香川県水産試験場

## 1 気象・海象

### (1) 水温（図 1）

今期の屋島（備讃瀬戸）の水温は、11 月以降 2 月中旬まで平年より高く推移した。月平均水温の平年差は 11 月が 1.11℃、12 月 0.67℃、1 月 1.21℃、2 月 15 日まで 1.54℃と高い状態が続いている。気象予報によれば四国の今後 1 ヶ月の気温は高めで推移すると予測されており、今後の水温も平年より高く推移すると予想される。

なお、イカナゴの産卵盛期の水温とされる 14～12℃になったのは、平成 18 年 12 月 17 日～平成 19 年 1 月 5 日で、平年（12 月 12 日頃～12 月 25 日頃）と比べ水温の低下が鈍かったためにその期間は長かった。また、水温 13℃を割り込んだのは 12 月 28 日で平年より 9 日程度遅かった。

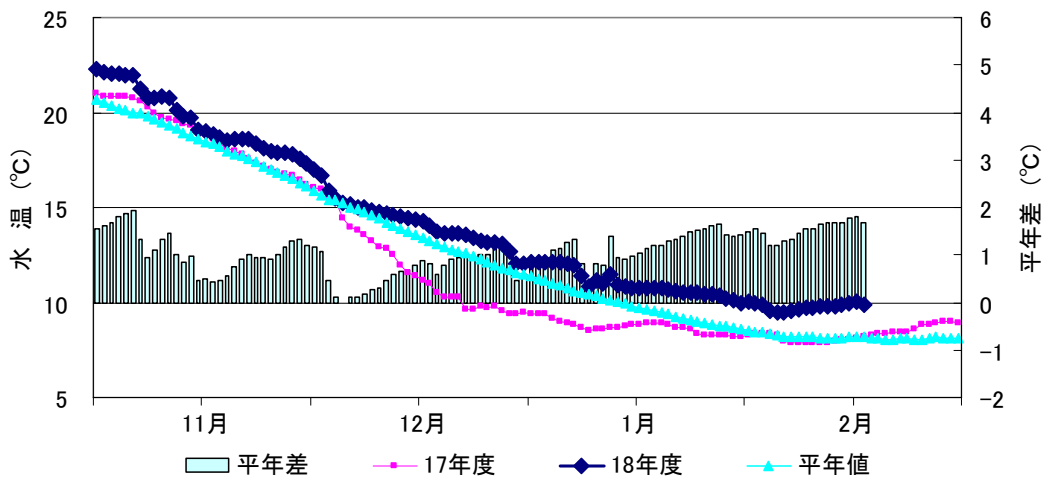


図 1 水温の推移(屋島湾水深 1 m)

### (2) 季節風（図 2）

季節風（特に西風成分）の強弱は、備讃瀬戸から播磨灘に運ばれるイカナゴ稚仔魚の量を左右し、風の強い方が分散が良く、生残が良くなる傾向がある。18 年 12 月の平均風速 (2.3m/s) は前年 (3.8m/s) および平年 (2.6m/s) を下回った。1 月の平均風速 (2.4m/s) は昨年 (2.4m/s) 並だったが、平年 (2.9m/s) を下回った。2 月上旬の平均風速 (2.7m/s) は昨年 (3.9m/s) および平年 (3.0m/s) を下回った。1 月以降の旬毎の平年差をみるとマイナスになっており、季節風は平年に比べ弱かった。

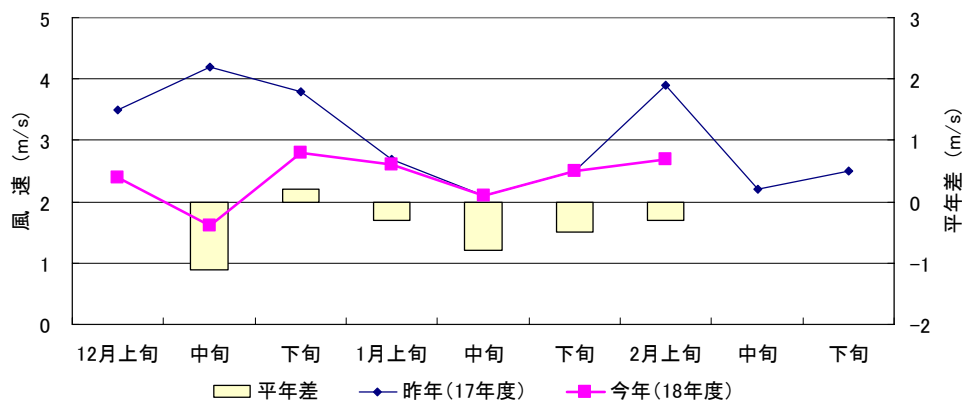


図 2 日平均風速の推移(高松気象台)

## 2 親魚調査

### (1) 産卵期 (図 3)

空釣りこぎを使い3ノットで3分間の調査を高松地区(5カ所)と庵治地区(7カ所)で3回づつ実施した。採集したイカナゴ親魚の生殖腺熟度指数(GI(%)=生殖腺重量÷体重×100)の推移を図3に示した。雄は12月15日から25日の間にわずかながら低下が見られる。雌は12月25日の調査では生殖腺熟度指数の低下は見られなかったが、産卵直前の熟卵を持った個体が多かった。熟卵を持つ割合は0才魚より1才魚のほうが多かった。また、1月15日の高松地区のイカナゴ解禁日に300尾の産卵状況を確認したが、抱卵している個体は見つからなかった。

主な産卵は0才魚が12月末から1月上旬、1才魚以上が12月末に行われたと考えられる。

成熟魚の割合は高松が0才魚で60%、1才魚以上で100%、庵治は0才魚で74%、1才魚以上で100%だった。平年に比べ0才魚の成熟の割合が低かった。

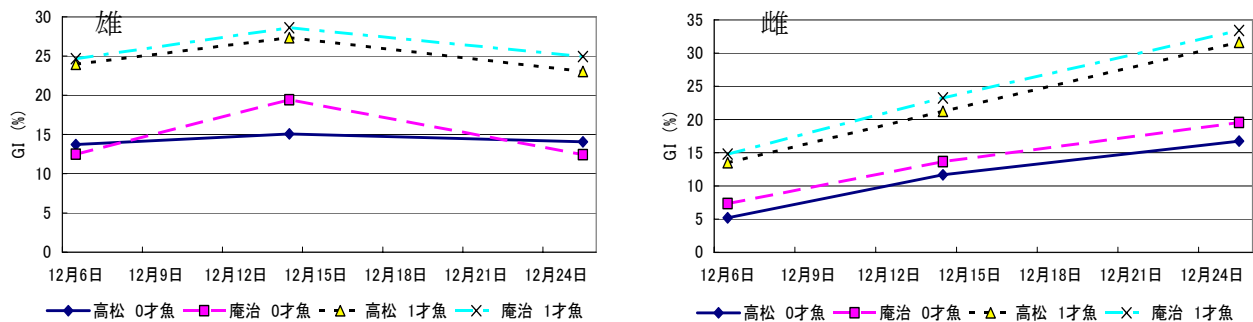


図 3 生殖腺熟度指数の推移 \* 年齢の起算日は1月1日

### (2) 産卵親魚の組成 (図 4)

全長測定の結果を図4に示した。平均全長は高松が0才魚77mm、1才魚119mm、2才魚158mm、庵治が0才魚78mm、1才魚121mm、2才魚165mmだった。年齢別組成を見ると、0才魚が774尾(42%)、1才魚1031尾(57%)、2才魚13尾(1%)だった。庵治と高松を比較すると、高松の方が0才魚の割合が高かった。

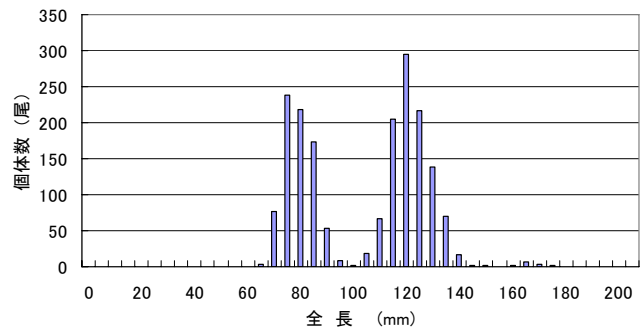


図 4 イカナゴ親魚の全長組成

### (3) 産卵量

19年1月15日から高松地区と2月1日から庵治地区のイカナゴ親魚漁獲状況や18年12月の13地点での親魚調査の採集尾数から見ると密度の高い場所が少なく、親魚数も少なかったと考えられる。

## 3 稚仔魚の出現状況 (図 5、図 6、図 7)

今期も備讃瀬戸および播磨灘の23の調査地点で、丸特Bネット(口径45cm)の鉛直曳きによりイカナゴ稚仔の採集調査を、1月前半(9日、10日)、1月後半(23日、24日)および2月前半(5日、6日)の3回実施した。調査地点毎の稚仔魚の採集尾数を図5、採集尾数の経年推移を図6、全長組成を図7に示した。

なお、備讃瀬戸および播磨灘の各々1調査地点は過去の蓄積データが少ないため、稚仔数の評価については、残り21調査地点(備讃瀬戸14点、播磨灘7点)を対象に行った。

### (1) 1月前半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は113尾で、昨年(181尾)より少なかったが、平年(平成9~18年の10年間の平均91尾)より多かった。採集された稚仔魚の平均全長は4.1mmであった。

播磨灘での稚仔魚の採集数は16尾で、昨年(20尾)および平年(19尾)より少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は4.4mmであった。

稚仔魚は主に備讃瀬戸中部から東部海域で採集された。

### (2) 1月後半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は407尾で、昨年(260尾)およびの平年(平成10~18年の9年間の平均72尾)より多かった。備讃瀬戸東部で1ヵ所224尾採集された地点があった。採集された稚仔魚の平均全長は5.0mmであった。

播磨灘での稚仔魚の採集数は20尾で、昨年(138尾)および平年(53尾)よりかなり少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は5.4mmであった。

稚仔魚は主に備讃瀬戸中部から東部海域で採集された。また、西風が弱く分散が悪かったため、全長7~10mmの個体が備讃瀬戸でみられた。

### (3) 2月前半調査

備讃瀬戸での稚仔魚の採集数は16尾で、昨年(21尾)の採集尾数より少なかったが、平年(平成9~18年の10年間の平均13尾)よりは多かった。採集された稚仔魚の平均全長は5.7mmであった。

播磨灘での稚仔魚の採集数は26尾で、昨年(100尾)および平年(23尾)より少なかった。採集された稚仔魚の平均全長は8.4mmであった。

稚仔魚は主に播磨灘海域で採集された。

3回の調査の稚仔魚の採集数の合計は588尾(備讃瀬戸536尾、播磨灘52尾)で備讃瀬戸での採集数が播磨灘の10倍程度あった。採集数を比較すると昨年の720尾(備讃瀬戸462尾、播磨灘258尾)より少なく、平年の271尾(備讃瀬戸176尾、播磨灘95尾)より多かった。

各調査での採集された稚仔の全長組成を昨年と比較すると、昨年よりも備讃瀬戸で多くの稚仔が採捕されたことや大型サイズの稚仔が採集されており、このことから今期の稚仔魚の分散が良くなかったことが推定される。

## 4 2月上旬までのイカナゴ(親魚)の漁獲状況

高松 1月15日から込網漁を開始した。2月15日までの漁獲量は130トン(延べ106隻)、1日1隻あたりの漁獲量は1.2トンで、平年よりやや少なめの漁獲である。なお、1月15日に入手したイカナゴ標本の平均全長は88.0mmで、1才魚(88%)、2才魚以上(12%)だった。

庵治 2月1日から込網漁を開始した。2月15日までの漁獲量は15トン(延べ26隻)、1日1隻あたりの漁獲量は0.6トンと不漁である。なお、2月5日に入手したイカナゴ標本の平均全長は119mmで、1才魚(33%)、2才魚以上(67%)だった。

## 5 シンコ漁の予測

今期は稚仔魚の採集数も平年に比べて多く、餌条件も1月中旬から珪藻プランクトンが繁殖し、好条件であったが、1月以降の西風が弱く分散が悪かったため、稚仔の出現数ほどの漁獲は見込めないと考えられる。

以上のことから、本年のシンコ漁獲量は、昨年を下回り、平年(H3~H16)よりやや少なめであろうと予測される。

平成 18 年

平成 19 年

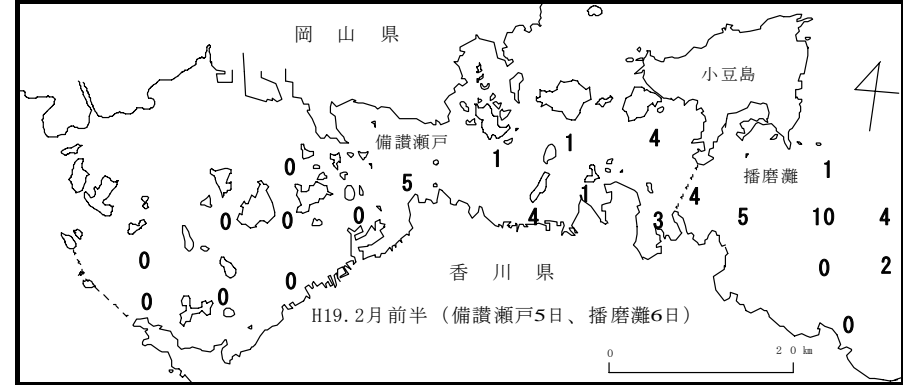
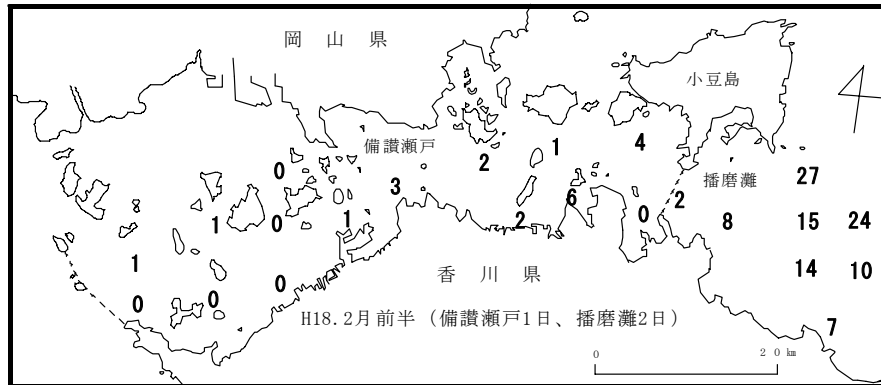
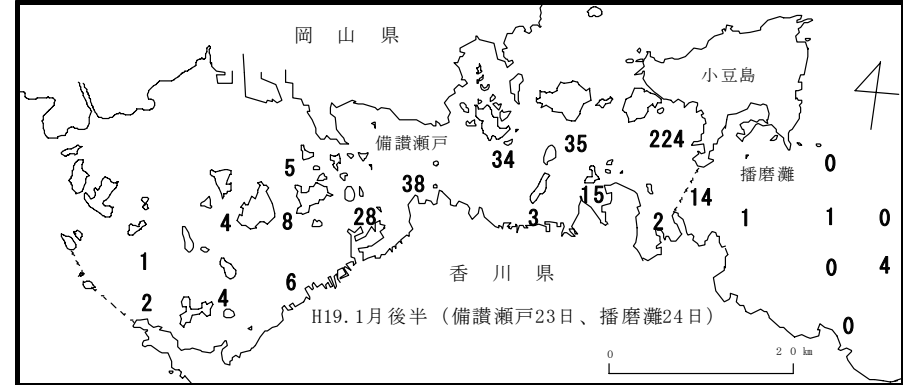
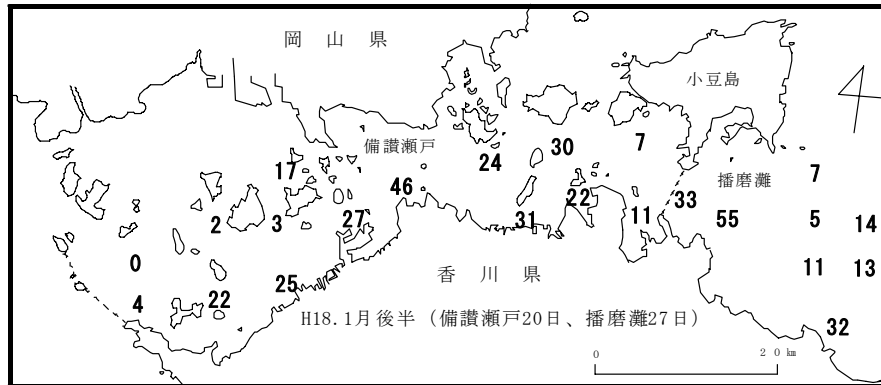
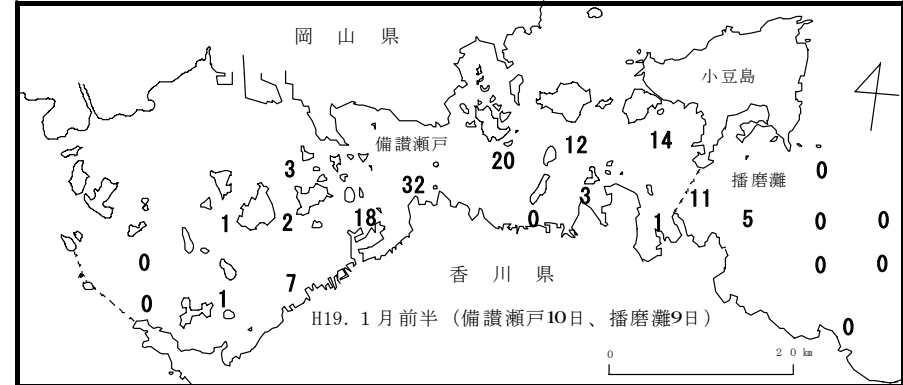
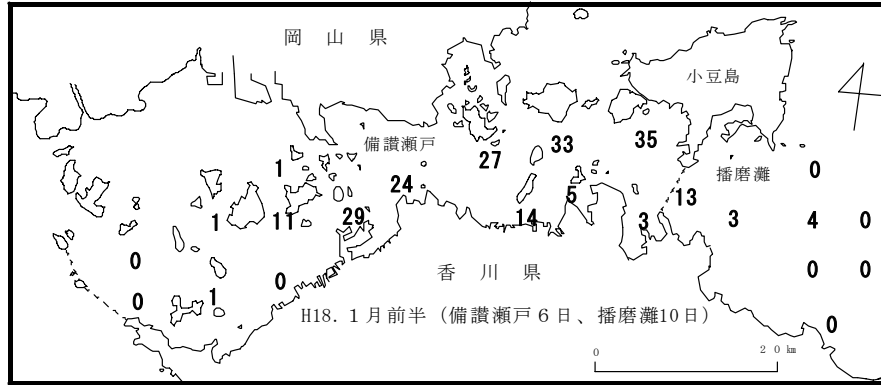
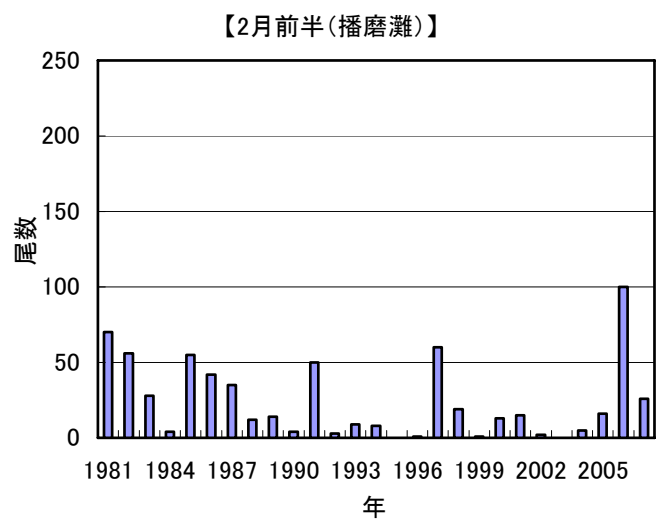
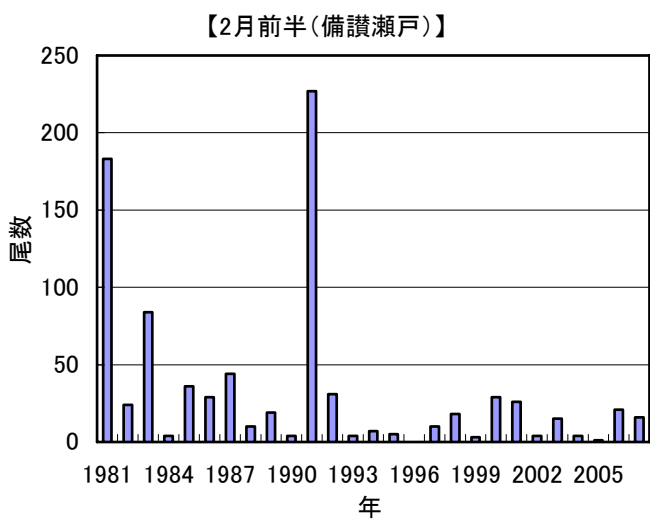
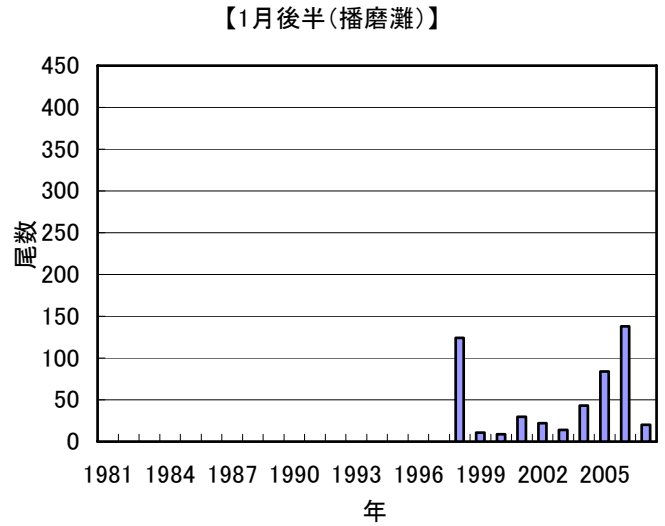
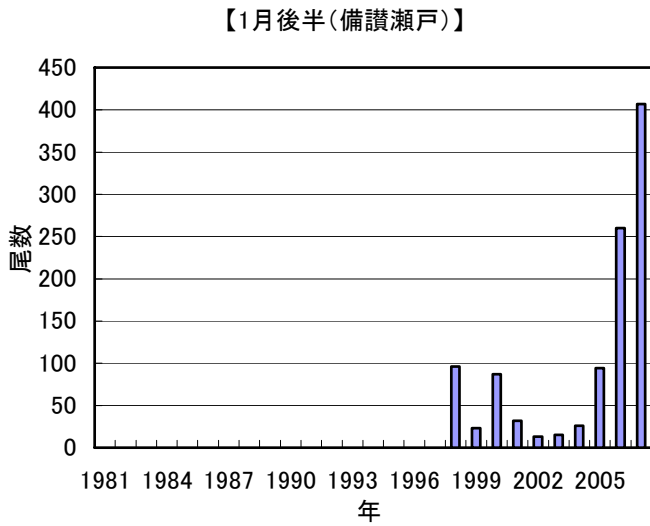
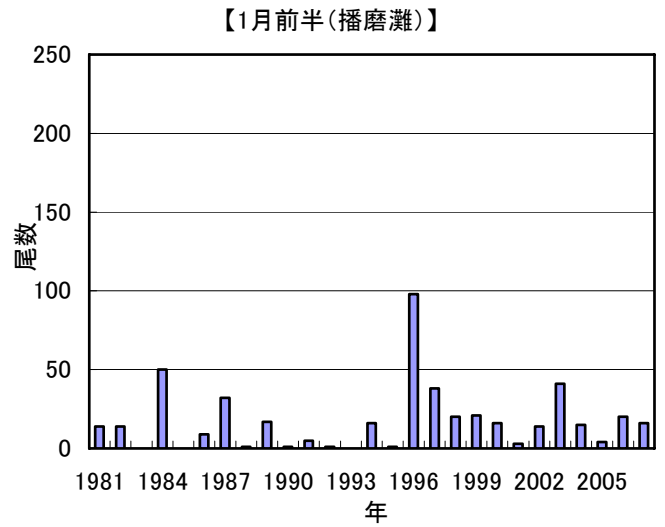
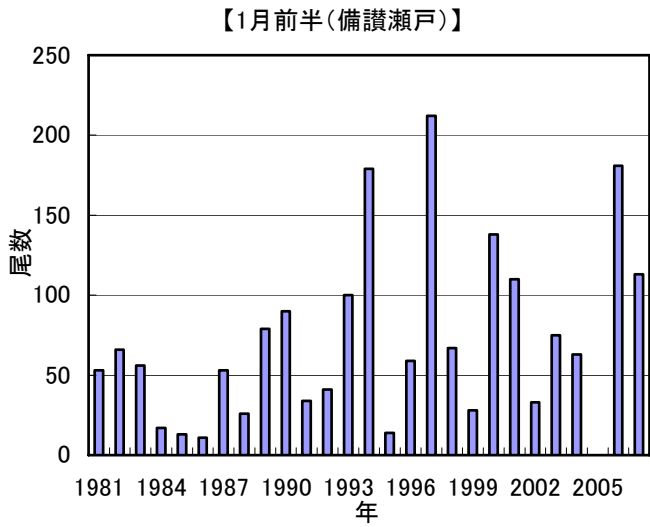


図 5 イカナゴ稚仔魚の採集尾数 (特Bネット一曳網あたり)



備讃瀬戸: 調査点14点の合計  
播磨灘: 調査点7点の合計

図6 イカナゴ稚仔魚採集尾数の推移 (特Bネット一曳網あたり)

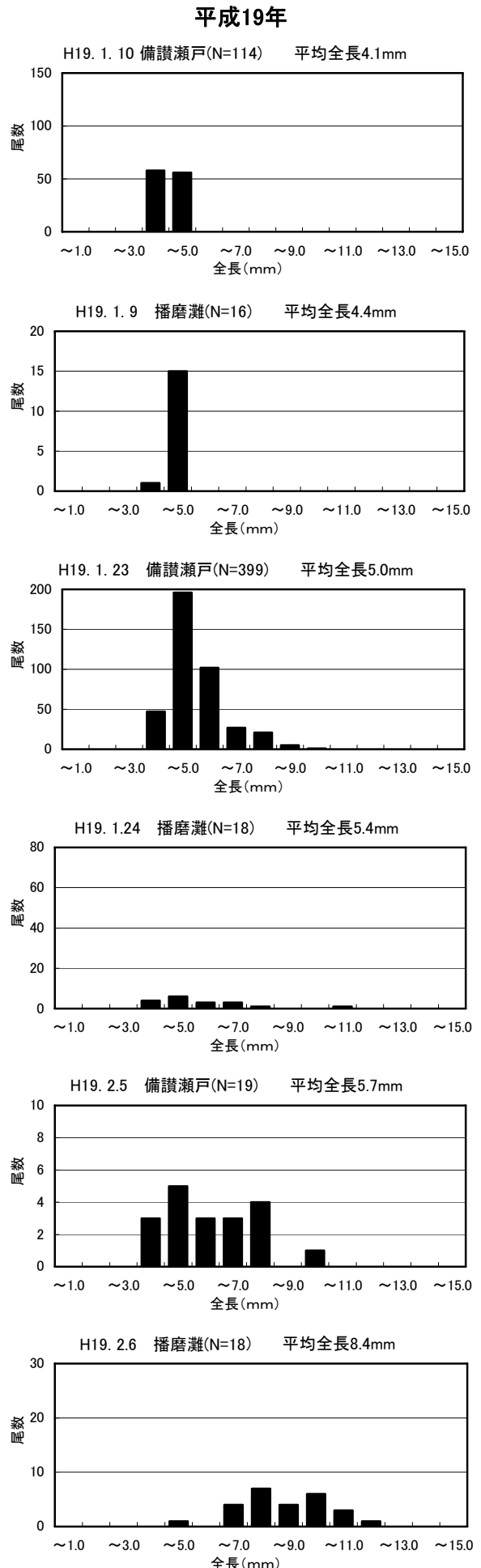
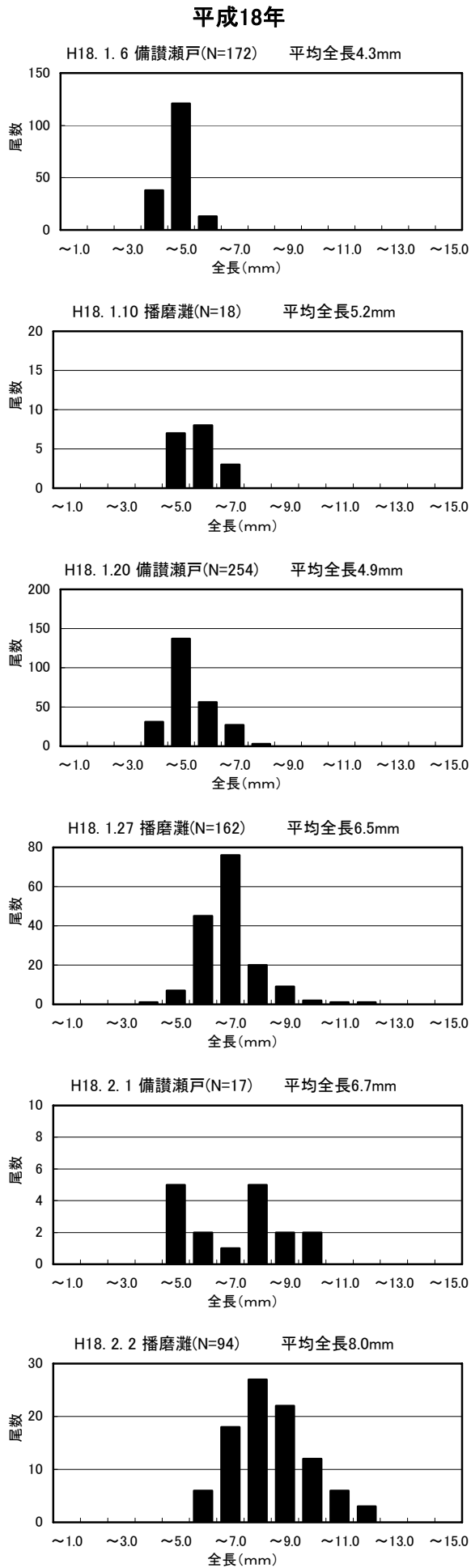


図7 イカナゴ稚仔魚の全長組成